

テーマセッション

地域に根差した急性期病院としての役割

The Role of Community-Based Acute Care Hospitals

若林 稲美 Inami Wakabayashi (武蔵野赤十字病院)

キーワード：地域連携，急性期病院頭，在宅支援研修

key words : regional cooperation, mind in acute care hospital, support training at home

東京都武蔵野市は東京都のちょうど真ん中に位置する人口およそ14万人の街である。緑豊かな住宅都市であり、住んでみたい街としてのイメージが定着している。また、ユニークな施策を全国に先駆けて実践してきたことでも有名な街である。武蔵野赤十字病院はこの武蔵野市の西に位置しており、市内唯一の総合病院である。

武蔵野市では「いつまでもいきいきと健康に、ひとり暮らしでも、認知症になっても、中・重度の要介護状態になっても、住み慣れた地域で生活を継続できる」をコンセプトに事業を展開している。このコンセプトは、高齢者が元気に生活をしている時期から、中・重度の支援が必要になった場合にも、継続して支援し、武蔵野市で生活し続けていくことを表している。

「いつまでもいきいきと健康に」というのは、健康増進と介護予防に関する事業である。高齢者の健康づくりを支える『いきいきサロン』活動や高齢者が街に出やすいようなコミュニティーバスの運行を行っている。

また、一人暮らしの方を対象にして『高齢者安心コール』や『何でも電話相談』を実施している。その後、認知症になった場合に備え、『普及啓発活動』『相談事業』『サービスの実施』を3本柱に、相談事業や認知症サポーター養成講座、キャラバンメイト養成講座を実施している。

中・重度の要介護状態になっても地域で生活するためには、高齢者施設の充実と、医療、介護等の多職種間で連携していくことが求められる。私たちの医療圏は武蔵野、三鷹、小金井、府中、調布、狛江の6市からなる北多摩南部医療圏である。人口約100万人の

医療圏であるが、その中には、回復期を担う医療施設が非常に少ないという現状があった。そこで平成20年に北多摩南部脳卒中ネットワークを発足させた。地域で連携していくことを主目的に、急性期病院から在宅まで、地域で共通のパスを活用して連携していく仕組みづくりを行った。

このような地域にある急性期病院として、私たちは何ができるのか、どうあることが適切なのか考えてみた。

まず一番に思うことは、急性期病院の看護師は『急性期病院頭』であるということだ。平均在院日数10日、全身麻酔手術が年間約8,000件という当院においては、高度な医療器械を使い、多くの薬品を使う医療がごく当たり前の日常である。個々の患者の自宅に帰ってからの生活は、特に若い看護師には想像しにくい。臨床の間では、「こんな大変な患者さん、一人暮らしは無理」「老夫婦での生活は難しいのでは」という声が聞かれ、「転院先を探しましょう」という論調になる。しかし本当にそうだろうか。ゆっくりしたペースで、自身の健康状態や体力と相談しながら、穏やかに生活している方が大勢いることを急性期病院の看護師は知らなければならないと思う。

当院では平成27年から、1年目の看護師を対象に「在宅支援とスクリーニング」の研修を開始し、4年目の看護師に「在宅支援研修」として、訪問看護ステーションの看護師に同行して自宅で生活する方の実際を見る機会を設けている。『1年目の看護師は目の前の医療器械の取り扱いや目まぐるしく変わる病態の変化についていくのが精一杯で、先を見据えたケアまでの余裕が無い』と考えがちだが、学生時代から在宅看

護論を学んでいる新人は、年配者が思うより、受け入れがよい。研修の感想でも、「暮らしの場へ戻れるような意思決定支援をしていきたい」「退院後や在宅のことについても考えて看護したい」という感想が散見される。早い時期から患者の自宅での生活をイメージし、その点を踏まえた、実際に役立つ、現実的な退院指導に繋げていきたいと考えている。『急性期病院頭』を柔らかくし、病気を抱えながらも、地域の中で生活していく人を思い描きかかわっていきたい。

急性期病院である当院の地域住民とのかかわりは、病気になってから、と思いがちだが、当院は東京都からの認知症疾患医療センター事業を受託しており、認知症相談を当院の精神保健福祉士が受け、週に1回の『ものわすれ外来』を実施している。『ものわすれ外来』では、認知症認定看護師も活動し、細かい生活状

況の聞き取り等を行っている。加えて『認知症サポーター養成講座』の講師を務めるなど、普及啓発活動も行っている。

認知症の周辺症状等は、病気として認識され、適切な対応がわかれば、穏やかに協力的に取り組めることがある。専門的な知識と生活者の視点とを兼ね備えた看護師の視点を地域の中に取り入れていくことで、憂慮することが少なくなり、生活の質が上げられるのではないだろうか。

地域に根ざした活動というのは、高齢者ケアに限らない。当院では、災害訓練や小・中学校での健康教育、母子保健領域にも携わっている。日ごろから各部門で顔の見える関係作りをしていることが、地域連携の基礎になっている。